

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：44428

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02472

研究課題名（和文）行動規範や価値観の多様性に着目した多文化共生保育の研究

研究課題名（英文）Research on multicultural childcare focusing on diversity in behavioral norms and values

研究代表者

卜田 真一郎（Shimeda, Shinichiro）

常磐会短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：20353021

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、多文化共生保育実践における「保育の場（園）の多様性」と「人（保育者）の多様性」と、価値観や行動規範の多様性に関する問題の検討を目的としている。「保育の場の多様性」については、様々な多文化状況の保育現場に関わる保護者・保育者等との対話を通して、場の特性に応じて生じる価値観や行動規範に関する課題を検討した。「保育者の多様性」については、ドイツ・ライプツィヒの移民や難民の子どもが在籍する保育現場で勤務する、移民でありムスリムである保育者のキャリア形成の過程を抽出し、言語的・宗教的背景が異なる中で、彼らが保育者としてのアイデンティティをどのように確立しようとしているのかを描出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的・社会的意義として、次の点を挙げる事ができる。

国際的な共生課題と深くかかわった研究：宗教的多様性や価値観の多様性の中での共生について検討した点。特に、国際的な共生を巡る課題であるイスラームとの共生について検討した点は特筆すべき点である。また、実践者の当事者性に着目した研究：保育実践を支える一人ひとりの保育者の当事者性（あるいは非当事者性）に着目した検討は、多文化共生保育研究における新しい成果である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine issues related to "diversity of childcare settings (preschools)" and "diversity of people (caregivers)" and diversity of values and behavioral norms in multicultural childcare practices. With regard to "diversity in childcare settings," we examined issues related to values and behavioral norms that arise in accordance with the characteristics of the settings through dialogue with parents, caregivers, and others involved in childcare settings in a variety of multicultural situations. The study of diversity among caregivers examined the career development of immigrant Muslim caregivers for immigrant and refugee children in Leipzig, Germany, and explored how they attempted to establish their identities as caregivers from different linguistic and religious backgrounds. The study also examines how they try to establish their identities as caregivers in the midst of their different linguistic and religious backgrounds.

研究分野：保育方法学

キーワード：多文化共生保育 価値観・行動規範の多様性 イスラームとの共生 園の多様性 保育者の当事者性

## 1. 研究開始当初の背景

国際的な人の移動に伴う地域社会の多文化化・多民族化が進行する中、日本の保育現場も「多様な子ども・保護者・保育者が共に暮らす場」となりつつある。こうした中、多文化共生保育についての研究や実践は日本国内においても相当の蓄積が行われてきた。本研究の開始当初においては、多文化共生保育研究の焦点は、外国人の子どもの保育問題が検討され始めた当初の「新たな保育ニーズを受け、どのように保育を展開するのかという段階」を経て「国際化する保育の質をどのように高めるのかという質の向上の問題」に移行していると指摘されていた(品川, 2011)。また、園の多文化状況の違いによる保育課題や保育実践の違いに焦点を当てた研究(ト田・平野・臼井・戸田, 2015)、多文化共生保育における保育者の意識に焦点を当てた研究(品川, 2011)、外国人保育者や通訳者が果たす役割についての研究(品川, 2011; 佐々木, 2014 など)など、多文化共生保育実践の多様性と「場」の問題、及び、実践を行う「人」の問題に着目した検討が行われていた。

こうしたことから、多文化共生保育の研究は、人々がもつ差異の質的違いに着目した検討、具体的な場と人に応じた「質」のありように着目した検討が必要であると考えに至り、この研究が開始された。

人々が持つ差異は、民族・文化・信仰・個人の特性などの多様な側面においてみられるが、こうした差異は外面的なものにとどまるものではなく、人々の価値観や行動規範といった内面的な差異に繋がっており、そこでは摩擦・対立・抑圧が生み出されるリスクがある。多文化共生保育の課題は、日々の保育実践における摩擦・対立・抑圧のリスクを超えて共生を実現することであり、そうした実践を通じて、子どもたちに共生を実現できる力を育むことである。このように考えた時、多文化共生保育の研究には、人々の価値観や行動規範を巡る課題の所在を明らかにすることと、各現場の実践に学びながら、共生を模索するための保育実践のありようを示すことが求められる。こうした価値観や行動規範を巡る課題は、各園の多文化化の状況によって異なると考えられ、場の特性に応じた課題の所在と実践のありようをより深く検討する必要がある。

また、保育者自身も、自身の民族・文化的背景・信仰・特性などによって方向付けられるさまざまな価値観や行動規範を体現する存在であり、多様性を巡る課題に対して、当事者性あるいは非当事者性を持つ存在であるが、こうした多様性のありようは、保育実践にもさまざまな影響を及ぼすことが予想される。保育者自身の当事者性・非当事者性が多文化共生保育実践に与える影響の検討は、多文化共生保育に関わる保育者の育成・支援の方向性を明らかにすることに繋がる課題であると考えた。

本研究開始までに、本研究チームのメンバーは、園の多文化状況の違いが多文化共生保育に与える影響について、「差異の可視性」や「集団複雑性」などの指標を用いて調査協力園を類型化し、園の多文化状況に起因する集団の特性によって、子どもの現状や課題・保育の目標・保育の中での取り組み内容が異なることを指摘してきた(ト田・平野・臼井・戸田 2015)。また、来日第二世代保育者(子どもとしての来日経験をもつ保育者)のキャリア形成過程を検討し、自身の当事者としての経験が多文化共生保育実践に果たす役割や、園の管理職の意識が来日第二世代保育者の園内での役割に与える影響について検討してきた(林・佐々木・ト田・戸田 2017)。さらに、学会シンポジウムや研究プロジェクト等の場で「イスラームとの共生」や「さまざまな人権問題と多文化共生保育の関連」をテーマにした対話を重ねてきた。その中で、多様な価値観が交錯する保育現場において、「マジョリティとマイノリティ間の価値観の対立や摩擦」のみならず、イスラームと SOGI マイノリティなど「マイノリティ間の価値観の対立や摩擦」が生起する可能性を議論してきた。

こうした検討を重ねる中で、「場」や「人」などの要因が実践に与える影響の大きさを確認するとともに、民族・文化・信仰・個人の特性などに起因する価値観や行動規範の違いに起因する摩擦・対立・抑圧を超えて共生を模索することが、多文化共生保育の中核的課題であることを改めて確認してきたことが、本研究の着想へとつながっていた。

なお、本研究は「多文化共生保育実践の多様性を統合的に理解するための枠組みの構築」(2012～2014年度 基盤研究 C 課題番号 24531044)及び「多文化化の状況要因を踏まえた多文化強瀬保育実践の多様性の把握枠組みの精緻化」(2015～2017年度 基盤研究 C 課題番号 15K04336)の研究成果を踏まえて実施された。

## 2. 研究の目的

本研究では、価値観や行動規範の多様性を保育の「場」と「人」の特性に着目して検討し、場と人の特性に応じた課題を明らかにするとともに、摩擦・対立・抑圧のリスクを超えて共生を実現できる多文化共生保育のありようを模索することを目的とした。そのために、次の2点を研究課題とした。

【A：多様な価値観・行動規範の共生を実現する多文化共生保育の「場」の検討】

各園の多文化状況に応じて生起する価値観や行動規範の多様性の問題を検討し、摩擦・対立・抑圧を超えて共生を実現できる保育実践のあり方を模索する。特に、国際的な共生課題であるイスラームとの共生を視野に入れた検討を行う。この検討を通じて、保育の「場」の特性と差異の特性に応じた多文化共生保育の課題と実践のありようを描出する。

#### 【B：保育者という「人」の当事者性・非当事者性と多文化共生保育の関連の検討】

保育者自身の当事者性・非当事者性に起因する保育者自身の価値観や行動規範に着目し、多文化共生保育実践において、保育者の当事者性・非当事者性を巡る課題を描出し、保育者の育成に関わる方向性を示す。ここでは、在日外国人、イスラーム、SOGI マイノリティなどの当事者性を持つ保育者を対象にした調査を行い、保育の「実践者」の持つ当事者性に応じた多文化共生保育を巡る課題と実践のありようを描出し、多様性を活かすことができる保育者集団のありようを検討する。

### 3. 研究の方法

本研究では、上記の研究課題A・Bに基づいて、次のような検討を行った。

#### 【A：多様な価値観・行動規範の共生を実現する多文化共生保育の「場」の検討】

保育・幼児教育関係の学会シンポジウムにおいて、多様な価値観・行動規範の共生を実現する多文化共生保育の在り方について議論を行った。また、海外で生活する日本人保護者や日本国内の保育現場に子どもが在籍しているムスリム当事者の保護者との対話を実施し、多様な価値観・行動規範の共生を実現する多文化共生保育の「場」について検討を行った。

#### 【B：保育者という「人」の当事者性・非当事者性と多文化共生保育の関連の検討】

保育者自身の価値観や行動規範が、保育実践や職員集団の意識にどのような影響を与えているかを、ドイツ・ライプツィヒの保育現場で勤務する移民でありムスリムである3名の保育者を対象に、自身のライフヒストリーと実践への意識についての聞き取り調査を実施した。データ分析にはTrajectory Equifinality Modelling (TEM)法を使用し、「ドイツ到着」を「起点」、「教師として働く現在」を「終点」とし、時間軸に沿ってデータを整理した。

また、学会シンポジウムなどの機会を通じて、在日外国人の保育者、SOGI マイノリティ当事者である保育者の語りを聞き、自身の当事者性と多文化共生保育の関連について検討を行った。

### 4. 研究成果

#### 【A：多様な価値観・行動規範の共生を実現する多文化共生保育の「場」の検討】

シンポジウム等での対話を通して、それぞれの「場」において、価値観や行動規範の相違により生起するさまざまな課題が明らかにされた。「場」の特性の違いは、外国にルーツのある子ども自身が直面する困難との出会い方の相違にも繋がっており、差異の可視性の違いに着目した場合、差異の可視性が高い場合は、文化間移動により直面する、生活やコミュニケーションにおける急速な変化があり、さまざまな困難が生起し、日常における安心感が急速に失われるリスクがあるが、差異の可視性が低い場合は、成長に伴い、社会との接点の中で自己のアイデンティティに関わる揺れや居場所感の喪失を経験するリスクがあることが示された。

それぞれの「場」における価値観・行動規範を巡る課題の解決のあり方は、ドイツとカナダにおける民族的な多様性の受け入れ方の相違にみられるように、社会的・文化的な背景によって大きく異なっていることも確認された。

さらに、「場」における価値観・行動規範のありようによっては、イスラームとSOGI マイノリティなど、マイノリティ間での相克が起こる可能性があることも示された。

こうした一連の検討を通じて、当事者性を持つ保育者・保護者一人ひとりの語りに耳を傾けることの重要性が改めて確認された。一人ひとりの生活実感に根差した語りの内容は、「その人」の語りであって、過度な一般化はなされるべきではないが、「一人ひとり」の語りが蓄積されることによって、より深く、かつ柔軟な理解が可能になり、ステレオタイプの理解を克服することや、共生への糸口を見出すことに繋がる可能性が示唆された。

ただし、多文化を考えるにあたって、民族や国といった単位でひとくくりにして捉えてしまうのではなく、一人ひとりの「人」に着目することは重要であるが、一人ひとりの「人」は、社会的・文化的・歴史的背景を背負った存在、その背景によってもたらされる様々な人生の経験や宿命を背負った存在であるという前提も看過すべきではないことが確認された。

保育者自身が一人ひとり異なる成育歴や文化的・社会的背景を持った存在であり、一人ひとりが独自の価値観や行動規範を持つ存在である。そうした個人の集合体である保育現場（園）も、ある一定の価値基準に則って園運営を行っている。こうした保育者や各園が持つ価値観や行動規範は、保育内容の選択・子ども理解・保育者の子どもや保護者への関わり方のように影響を及ぼしている。多文化化・多民族化が進む中で、保育現場においてもさまざまな価値観や行動規範の交錯がより鮮明に可視化されることになるが、これは保育者や各園が持っている価値観や行動規範とは異なる価値観や行動規範を持つ子どもや保護者との出会いを意味しており、多様な価値観が交錯する中で、保育者や園はその価値観にいかに関与すべきかが問われる。だからこ

そ保育者自身や園の職員全体が多様性を尊重する態度を身に付けることは、多文化共生を実現するための重要なファクターになることが改めて確認された。

【B：保育者という「人」の当事者性・非当事者性と多文化共生保育の関連の検討】

ドイツ・ライプツィヒの保育現場で勤務する移民でありムスリムである保育者のライフヒストリーと多文化共生保育の関連についての検討では、整理した TEM 図から、来独から現在までの人生の経路として以下のような結果が得られた。

独学や現地校への通学でドイツ語を習得

職業訓練センターで、保育の仕事に興味を持ち、保育の資格が取れるので働きたいが、ヒジャブをかぶっていると就職に影響することに気づく

困難を乗り越え、KITA で外国にルーツを持つ子どもたちと一緒に働く。母国語を使って通訳として役に立ってるが、ドイツ語の力は不十分だと感じている

子育てに不熱心な外国人の親に不満を感じる

自分たちのような保育者が、子どもたちが外国に興味を持ち、安心感を与え、ドイツと母国を結ぶ架け橋になることができると感じている

といった人生の経緯が示された。

この結果から、当事者であることを生かした保育実践に至るまでの経路の中で、ムスリム当事者であることで、就職時や職員集団内関係において、生きていくために必要な選択 と 宗教的な信念 の間の葛藤を経験する可能性が高いこと、生きるために「さまざまに折り合いをつける」ことが求められることが示された。また、ホスト社会の中で自分の現在の職を「勝ち取っていった」経験が、同じ当事者性を持つ人への厳しい見解につながる可能性が示唆された。また、当事者自身の中で折り合いをつけていくこと と その状況を生みだしている社会の変革を願うこと の兼ね合いが、さまざまである可能性が示された。

シンポジウム等における在日外国人や SOGI マイノリティ当事者の保育者の語りからは、自身の子どもの頃の経験と類似した背景を持つが故に不利な状況に立たされている子どもとの出会いが、自身の当事者性を生かした保育実践に取り組むきっかけとなっていること、被差別体験の違いが、実践への意識に影響を与えている可能性が示唆された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 ヘンケル敦子・ト田真一郎・戸田有一	4. 巻 42
2. 論文標題 保育現場におけるイスラームとの共生を巡る対話(2) -ライプツィヒ在住の日本人保護者とムスリムの保育者の出会いをめぐって-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪教育大学 幼児教育学研究室 エデュケア	6. 最初と最後の頁 19 - 29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 オンバダ香織・ト田真一郎・戸田有一	4. 巻 40
2. 論文標題 保育現場におけるイスラームとの共生を巡る対話(1): ムスリムである保護者との鼎談を通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 エデュケア	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.32287/td00031704	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 ト田真一郎	4. 巻 1029
2. 論文標題 論説『現在』と『将来』の課題を見据えた多文化共生保育について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 初等教育資料	6. 最初と最後の頁 92 95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 ト田 真一郎、白石 雅紀、田中 一步、近藤 孝子、長澤 貴、岡田 美保
2. 発表標題 自主シンポジウム「保育現場におけるイスラームとの共生の模索」
3. 学会等名 日本保育学会 第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ト田 真一郎、オンバダ香織、林恵、佐々木由美子、ヘンケル敦子、平野知見、戸田有一
2. 発表標題 自主シンポジウム「保育現場におけるイスラームとの共生の模索」
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会 第30回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ト田真一郎・白石雅紀・戸田有一・松山寛・佐々木由美子・香曾我部琢・西上紀江子
2. 発表標題 自主シンポジウム「多文化共生保育に関わる保育者育成の現状と課題」
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第29回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ト田真一郎・長澤貴・戸田有一
2. 発表標題 自主シンポジウム「イスラームとの多文化共生保育をめぐる課題と視点の整理」
3. 学会等名 日本保育学会第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ト田真一郎・戸田有一・林恵・佐々木由美子・杉浦俊太郎
2. 発表標題 自主シンポジウム「保育現場におけるイスラームとの共生の模索」
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第26回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	平野 知見  (Hirano Tomomi)  (10441122)	京都文教大学・臨床心理学部・准教授   (34320)	
研究 分担者	長澤 貴  (Nagasawa Takashi)  (20515134)	鈴鹿大学短期大学部・こども学専攻 幼稚園教諭・保育士 コース・教授   (44104)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------